

## 日本農政史上に輝く 対馬の野猪狩り

対馬は「魏志倭人伝」にも登場する、中国・朝鮮文化の中継地として古くから栄えた島である。江戸時代には、鎌倉時代から続く十萬石を公称する宗家が治めていた。とはいえ、島の九十%近くが山地である対馬は田畑も少なく、そのうえ野猪、鹿、蝮などの害が多く、農民の生活は貧困をきわめていた。

中でも野猪の害は甚大なものであった。

ここに陶山鈍翁という男が登場する。

明暦三年（一六五七）、藩医の子に生まれ、十代で江戸の木下順庵の門に入り、同門六百人中、室鳩巢、雨森芳洲とともに木下門の三傑と称された。

帰国後、藩に仕え元禄十二年、四十三歳のとき郡奉行となった。奉行職について最初に計画し、断行したのが野猪狩りであった。

彼の計画は次のようなものであった。

対馬は南北に延びる細長い島である。

そこで東から西にわたって五つの牆を設け、六区画に分ける。

そして北から順に猪を狩ってゆき、しだいに南下し、最後の南端で全島の掃討を終える。

野猪を狩り出す方法は、猪が潜んでいる山に火を放つ。

そして勢子と犬で半里と一里半の長方形の区域を定めて追い出し掃滅する。

当然、この作業は農閑期に行われる。十一月から翌年二月まで実働七十日間である。

四年で終える予定であった。

当時は「生類憐れみ令」の世である。藩内でも反対の声は高かった。

しかし、鈍翁は「百年大計のために」と強行した。対馬藩のこの大事業が完了したのは宝永六年であった。

最初の計画の倍の歳月を要したわけである。

しかし、この鈍翁の大事業の結果はみごとにあった。

八万頭の猪が絶滅したといわれ、人口は増加し、農民の暮らしは豊かになった。

人々は鈍翁を「対馬聖人」と称し、その徳をたたえた。

